

施設長の独り言

今年7月、相模原市にある「津久井やまゆり園」において、入所者19人が殺害され、26人が重軽傷を負うという悲惨な事件が起つた。容疑者である元職員は、日常的に「障害者なんていなくなればいい」といった趣旨の発言を重ねていたという。容疑者のこうした発言は、事件を単に残忍な事件として捉えるだけでは不十分で、日本社会の根本的な問題について考える必要性を示唆している。この事件の根本にある深刻な問題の存在に気付かないでいたとしたら、将来は障害者だけでなく社会的弱者と言われる人々にとって悲劇的な社会になることが想像される。

私は障害者福祉の関係者が事件をどのように捉えているのか知りたいと思ふ。数団体の事件に対する声明を読んだ。大半の団体が「障害者の皆さんを全力で守ります」等の感情論的な内容で、一些か物足りなさを感じた。その中で、日本障害者協議会の藤井氏による声明は、対症療法に走りやすい日本社会に警鐘を鳴らす内容になつており、大いに評価したい。

そもそも日本では、弱い立場の者を助けようという思想が薄い。ある団体が「自力で生活できない人を国が助けられる責任はあるか」という調査を行つたところ、「ない」と回答した人は、中

国やヨーロッパ諸国は8%前後、アメリカは28%。なんと日本では38%と、およそ4割の人が「自力で生活できない人を国が助ける必要はない」と回答したのである。それが日本の国民の声なのかな。

国の施策からも、弱い立場にある障害者を軽んじる姿勢は垣間見える。当法人の施設「エルシーヌ藤ヶ丘」は、当初太田市に建設する予定であったが、最終的には黒保根村（当時）に建設された。いわば人里離れた山の中。そしてこれは当施設に限つたことではない。障害者施設の建設にあたつては、土地購入のための補助金がないため、多くの施設が人里離れた安価な地に建設せざるを得ない。開所して間もなく、施設見学に来た学生から「障害者の隔離ですね」と言われたことが今でも忘れられない。その通り。まさに社会防衛のための隔離であるからだ。津久井やまゆり園の事件を始め、高齢入院者の点滴殺人、老人ホームでの突き落とし殺人。これら事件の根本には「自力で生活できない人を助ける必要はない」という考え方と同じ思想があるのではないかと思えるのだ。

真に障害者を支えるための社会にしなければ、この先も同様の事件が起こるだろう。今こそ本格的な障害者差別の解消のために、国民の意識変化を促す行動を。